天間の手無観音

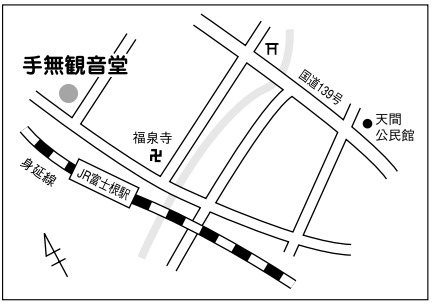
平成六年六月五日号

身延線富士根駅北側の天間川坂地区に、「手無観音」を祭っている観音堂があります。

今回は、この「手無観音」にまつわるお話について、今もなお観音堂を大切に管理している福泉寺の住職、岡田晨正さんに語っていただきました。

今から四百年くらい昔、室町幕府の第十三代将軍足利義輝の時代のことです。小泉村に川越の喜六という魚とりの好きな人が住んでいました。

喜六は、永禄二年六月十八日の夜に潤井川へ網を仕掛け、魚をとろうとしたのですが、網を引き上げたら、かかっていたのは魚ではなく、十二センチメートルほどの木像の観音様でした。



川を流れている間に取れてしまったのか、観音様の手は二本ともありませんでしたが、ピカピカ光ったその姿は、神々しいほどの美しさでした。

喜六は、不思議に思いながらも、とにかく家へ持って帰ることにしました。天間川坂まで来たとき、喜六は大きな松の根元の石に腰をかけ、観音様を置いて一服しました。

しばらくして、観音様に手をかけると、観音様は見る見るうちに大きくなりました。びっくりした喜六が両手で動かそうとしても、観音様は重くなってしまい、びくともしません。

喜六は、「これは、観音様がこの土地に永く住んで、人々を救おうというおぼしめしに違いない」と思い、お堂を建て、観音様を安置したということです。

▶ 手無観音

岡田晨正さん（天間）

この「手無観音」は、ご利益（りやく）があるということで、その名が口々に伝えられ、参拝の信者がふえました。そして、手無観音は遠くまで知られるようになり、「駿河・伊豆国三十三観音霊場」の一つとして祭られるようになったのです。

毎月十四日に地域の人たちが集まり、お経を上げています。二月と八月の十四日には祭りがあり、特に八月の大祭では、盆踊りなども行われ、大変にぎわいます。昔は、祭りの日に観音堂の前で競馬をしたこともあるんですよ。